山猫騒動

「では、集まって下さい」
木立の向こうにせせらぎの音が聞こえる、奥村雪男は散らばった塾生達に届くよう声を上げた。
拠点とするテントを中心に魔法円を描き終わり、四方に散って道具をまとめたり、別のテントを立てるための整地をしていた候補生（エクソシスト）達は顔を上げ、焚き火に囲むようにして集まった。焚き火はテントよりやや河原寄りにした。水質、量ともに豊かな河川だ、上流にはホタルも飛ぶらしい。ちなみにこちらは魍魎（コールタール）が川風に乗るかのようにふらりと通過している。
雪男は目視で人数を確認する。授業中に入ってきた任務だったので川に入れる用意もなく、塾生たちは制服姿だ、しかも何をするのかと誰もが疑問符を飛ばしたような顔をしている。
「すみません、任務内容も話さずに急に連れ出して」
「イヤ、別にええですけど…」
膝まで伸びた草むらに石塊を投げ、勝呂竜士が言う。志摩廉造が頭の後ろで腕を組みながら続けた。
「嬉しないけど、急になんか出たんやろうし」
急かされた設営の理由を知りたいような、知りたくないような半笑いの微妙な顔をしている。そんな志摩を冷ややかに見ているのが神木出雲だ、魔法円を描いているときにテントを張る志摩とうっかりぶつかったのだがどうも気まずい倒れ方をしたらしい。雪男と燐は火を熾していたので見ていないのだが、杜山しえみの顔がほんのり赤くなっていたので、志摩にはやや得することがあり、事故とはいえどラッキーだと宣った不謹慎さに猜疑心と小さな怒りを抱えているのだろう。
「うまくすれば早くに終わる任務です」
講義中の教室に湯ノ川が顔を出し、任務が入ったから、と告げてきた。科目は悪魔薬学、雪男の担当だ。怪訝な顔をする雪男に、湯ノ川は人手が欲しいらしいよ、と任務指示書らしい紙を渡す。雪男はざっと読み上げてから授業を中断、塾にある予備の野営用リュックを全員に持たせると鍵で現場に直行した。
現場は正十字森林地区の南西、元キャンプ地だ。数年前の豪雨による鉄砲水で甚大な被害を受けたためキャンプ地は流れの穏やかな下流に移動し、いまは朽ちかけたベンチや蔓が巻き、深い苔色に覆われた四阿（あずまや）などが名残として河原の石と生い茂った雑草に囲まれている。人の手入れがなくなったキャンプ地はすぐに自然の懐に取り込まれ、鬱蒼と茂った樹木たちに迫られては下級悪魔がひょろひょろと昆虫や蝶と同じように枝々の間を飛んでいた。
「先ほど、詳細な指示が届きました」
火の頃合いが良くなり、雪男は手にしていた木片を差し込みながら言う。
まどろっこしい、という顔で燐は首をこきりと鳴らすと肩の刀袋をかけ直す。黙ってはいるが、雪男と目が合うと尾をひょこひょこさせた、敵に臨むよりも好奇そのものだ。そういう軽薄げな態度をちらつかせるから雪男は兄を祓魔現場に出したくなくなるのだ。
「……」
ついっと視線を外す。相手はむっと口を尖らせた。

「ひと月ほど前から森に潜んで鳥や木の実を食い荒らしたり、ハイキング客に危害を加えていた妖獣の姿がこの場所で確認されました。結界を突破したようです」
「結界が？」
三輪子猫丸が不安そうな声を出す。
「はい」
緊張感を持続できる塾生は兄とは逆に固くなる。なるべく不安を煽らないよう穏やかに続けた、この任務は時間が読めず、疲弊したらそれだけ任務遂行（ミッションコンプリート）に手間取ってしまうからだ。経験の少ない候補生はまだその配分に慣れていない。しかも雪男に与えられる情報は現段階でも少なかった、タブレット端末を駆使して調べ、持ちうる限りの知識とで安全性をはかりながら完了までの手順を組み立てた。答えが出たのはつい先刻のことだ。
「入梅前に雷雨が続いた日があったと思いますが」
「薬日（くすりび）ですか」
雪男の説明も待たずに勝呂が返す、流石と思いつつ頷いてみせた。よくテキストを読み込んでいる。
「くすりび？」
しえみが首を傾げる、燐などはぽかんとした顔だ。あれほど諄く読んでおけと言ったのに鼻をほじほじやりながらの生返事はやはり馬に念仏、犬に論語。犬や馬の方がまだきっと賢い。兄には勝呂の爪の垢と苦い薬を煎じて飲ませたいところだが、この部分は授業でもざっと流すところなので補う必要がある。
「いわゆる端午の節句です」
眼鏡を押し上げ、説明する。
「迷信ではありますが東洋思想に、神水が降り、悪魔がおりてくる日といわれています。旧暦の五月の節句なので菖蒲湯や蓬に関わりますが、現行暦では六月、実際に黴の発生など悪魔が好む環境が出来上がる時期でもありますので、下級悪魔が集いやすい。そこへきて雨で結界の周囲が崩れ、穴が出来ていたんです」いまは直してありますが。
勝呂が頷く、出雲が思い出したようにそういえば、と呟いた。彼女などは迷信の類いなど信じないとばかりに目にしても記憶に留めずにいたのだろう。
「ここには土地神がいるとされています。通常の結界に加え、昔からの霊山信仰の名残がある。本山より分祀されていて、土地神が守護していたからキャンプ場もあった。ところが近年は水害もあり、祠も埋もれてしまい、土地神の所在は團でも掴めなくなっています」
土地神の多くは弱体化し消滅するが、クロのように凶暴化してしまうこともある。前者の見方が強かったが現段階では『どちらともいえない』、間もなく再調査のための隊が入る。
「奇しくも…先日の授業で話しました、麝香（じゃこう）、忘れてませんよね？奥村君」
「へっ？」
火を挟んで正面に突っ立っている燐が指名されてびっくりとでもいうように頓狂な声をあげる。復習という言葉を忘れてるなよ、兄さん。
動物から採取する生薬の使用法と薬効の講義である、悪魔を倒すのにはさほど有効ではないが知識程度にはあっても悪くない。じっさい、食いついたのは志摩くらいで、媚薬、媚薬とほんまに効くんですかそれ、を連発していた。志摩に必要なのはそれを嗅がされた後の抜き方や対処のような気がする。

「授業で挙げた特徴を述べてください」
「え…」
　燐はぴょこんと立てた尾の先を左右にそろそろと振ると回りをうかがい、俺？と誰ともなく指をさして問う。
「もう一人の『奥村君』は先生や」
「早く答えなさいよ」
　クラスのトップ2（ツー）は揃って容赦なく急かし、兄は視線もそぞろに情けないことこの上もない。
「えっとジャコ、は…」
『『ジャコウ』です、シャコでもありませんから」
　正してやる、毎度のことではあるがこいつほんとに授業聞いてんのかと改めて思う。覚える気がないのと覚えられなくて努力しないのとどちらがより悪いといえるのだろう。
「ジャコ、ウの…」
　燐は雑に頭を掻く。「分かんね」と誤魔化し笑いとでしゃらりと続きそうで、努力しない方がやはり罪深いように思えてきてイラっとする。
わかった、思い出させてやろう、復習。
「…あ」
　ふと顔を上げる。
「匂い」
　ぽつりと漏らすように口にする、そして雪男を見る。
　勝呂は腕を組み、分かるではないかという風に燐を眇め見、それだけははっきり覚えているだろう志摩は口笛を吹くマネをした。
「そうです」
　また曖昧な答えだ、十分とは言えないことに舌打ちしたいのを堪えつつ、まずは認めてやる。
「麝香はジャコウジカから採取しますが、ジャコウネコからも採取は可能です」
「それって…」
　と、出雲が挙手して発言しようとするのを
「山猫？」
　燐が遮る。その視線は燻っている程度の小さな煙をくゆらせている火ではなく、向こうの幅広の浅瀬を越えた森の方にあった。
「燐、何かいるの？」
　燐の隣に立っていたしえみが気にするように問う。
「いや、なんか…」
　雪男はそわそわ気にし出す候補生の視線を集めるべく、手を叩く。人の気もてんで気付けない鈍感さなのに変なところで動物並みというか、妙に鼻が利いたりする。そもそも燐のような存在は動物にとっては興味の対象になり、寄ってくるのかも知れないが。
「ジャコウヤマネコモドキ、です」
「モドキ」
　燐は雪男を見、最後だけを繰り返す、それって何だ？と言いたげだ。
「薪に香木を混ぜ、このテントに誘き寄せていますが」
　テントは二つ、野営用の装備は揃っているが、食糧がやや心許ない。警戒心の強い野生の動物相手にこれ以上外部からの何かを割り込ませたくもないし、出来れば日没までに済ませたいものだ。いわばこちらは再調査のための斥候部隊、雪男は塾生一同の顔を見回すと続けた。
「皆さんにはこのジャコウヤマネコモドキを捕まえてもらいます」
「は？」